

平成紙



おりおりの記

サムライと赤十字

日本赤十字社
副社長

大塚 義治

あの東日本大震災からちょうど一年が過ぎた。私は発災の十日ほど後に被災地を訪れたが、その惨状を目にしたとき、言葉を失い、ただただ息を呑むばかりであった。被災された方々に改めて心からお見舞いを申し上げ、一日も早い復興に向けて力強い歩みが刻まれることを、切に祈りたいと思う。

日赤も被災者支援に全力を挙げたが、それは、災害救護を本来の任務とする社として当然のことである。とはいえ、発災後直ちに被災地に向けて出動した多くの赤十字病院医療チームの奮闘ぶりには、つい胸が熱くなり、赤十字の一員として秘かに誇らしく感じたものだった。“いま動かなくて何が赤十字か”とスタッフに檄を飛ばし、自ら現地に赴いて陣頭指揮を執る院長たち。その姿に、私は、戦国時代の侍大将のイメージを重ねていた。

サムライといえば、新渡戸稲造の『武士道』の中に、ほんの「一瞬」だが、何と、日本における赤十字について触れている箇所がある。

新渡戸は同書の中で、源平の、一ノ谷の戦いにおける「青葉の笛」の物語を紹介しながら、ヨーロッパでキリスト教が果たした役割を、日本では、いわば武士道が果たしたと述べる。武士は、詩歌など「優雅の感情を養うこと」を奨励されたが、それは「他人の苦痛に対する思いやり」を生むことになる。それすなわち「惻隱」であり、赤十字運動がきわめて短期間に「我が国民の間に堅き地歩を占めた理由

の説明は、おおむねこの辺に存する」というのである。

ちなみに、『武士道』が著されたのは明治32（1899）年。日赤の前身である博愛社の設立後、わずか二十年余りのことである。



私の連想は、さらに広がって……。

大震災で最も深刻な被害の生じた地域の一つに、宮城県石巻市がある。圏内の医療機関も壊滅状態、辛うじて石巻赤十字病院のみが難を逃れた。そのため同院は、まさに地域の救援・救護の拠点としての役割を担う。その活躍ぶりはメディアなどにも度々取り上げられたから、ご存じの方も少なくないであろう。

これを統括、指揮したのは同院の飯沼一宇院長だが、彼は、飯盛山で自刃した会津白虎隊士の中で、たった一人、奇跡的に生き残った飯沼貞吉の直孫である。偶々といえばそれまでだが、私は、幕末に命を救われた一人の少年が、一世紀半の時を経、子孫の手を借りて多くの人々の命を救った、と思われてならないのである。